

カフカの『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』（2）

—ヨゼフィーネの歌が伝えるもの—

佐々木 博康

Kafkas *Josefine, die Sangerin oder das Volk der Mause* (2)

—Die Botschaft von Josefines Gesang—

SASAKI, Hiroyasu

大分大学教育学部研究紀要 第42巻第2号

2021年3月 別刷

Reprinted From

RESEARCH BULLETIN OF THE

FACULTY OF EDUCATION

OITA UNIVERSITY

Vol. 42, No.2, March 2021

OITA, JAPAN

## カフカの『歌姫ヨゼフィーネ、あるいはネズミ族』(2)

—ヨゼフィーネの歌が伝えるもの—

佐々木 博 康\*

【要 旨】 ヨゼフィーネの歌がネズミ族に伝えるものは何か。それは、ネズミ族の実存の根源的な孤独である。孤独を確認することで、個々のネズミは、どのネズミの内部にも「不壊なるもの」が共通に存在することを想起する。「不壊なるもの」とは、子供が持つ素朴な生きる喜びである。ヨゼフィーネの歌を聴くとき、ネズミたちは日頃抛り所に行っている実際の分別という武装を解き、互いに一体感を覚える。ここには芸術家と共同体の理想的な関係がある。しかし、この関係は、コンサートが行われている間だけの一時的なものである。ヨゼフィーネは自分の芸術に専念するために、ネズミ族の誰もが行っている日々の労働の免除を求める。しかし、ネズミ族はそれを拒絶する。やがてヨゼフィーネは歌うことを拒否し、民族の前から姿を消してしまう。語り手は、ヨゼフィーネがいなくてもネズミ族は特に困ることはないかもしれないとコメントする。しかし、作者カフカはそうは考えていない。人々に「不壊なるもの」を思い起こさせ、人々を融和に導くヨゼフィーネを失うことは大きな社会的損失であると確信している。

【キーワード】 信頼できない語り手 芸術 芸術家 不壊なるもの

### 4. ヨゼフィーネの歌が伝えるもの

上の引用には、「戦いの前の平安の盃」という表現が見られる。この「平安」はすでに述べた「憧れの平安」のことである。ヨゼフィーネの歌がネズミ族にどのような効果を与えるのかについての言及の後、歌が何を伝えているのかがより詳しく語られる。

我々が頭の中ではまったく別のことを考えており、静かなのはただ歌のためだけでは全然なく、多くの者がまったく舞台を見上げもせず、顔を隣のネズミの毛皮に押しつけているときでも、つまりヨゼフィーネがあそこの上で無駄な骨折りをしているように見える、そのようなときでも——これは否定できない——彼女のチュウチュウ鳴きからは拒むことのできない何かが我々の方へと迫ってくるのである。他のみんなに沈黙が課されているときに聞こえてくるこのチュウチュウ鳴きは、ほとんど民族のメッセージのように一人一人

---

令和2年10月30日受理

\* ささき・ひろやす 大分大学教育学部言語教育講座 (ドイツ文学)

に向かってやってくる。重大な決定がなされるさなかのヨゼフィーネのかぼそいチュウチュウ鳴きは、ほとんど、敵対する世界の騒乱のただ中にある我が民族の哀れな生（die armselige Existenz）のようである。ヨゼフィーネは自分を主張する。この声の中の無（Nichts an Stimme）、この業わざの中の無（Nichts an Leistung）が自分を主張する。そして我々への道を作り上げる。（362）

ヨゼフィーネの歌からは、「拒むことのできない何かが我々の方へと迫ってくる」、それは「ほとんど民族のメッセージのように一人一人に向かってやってくる」と言われる。ここでは真のコミュニケーションが成立している。「抜け目なさ」が生いのちの原理となる場合、個々人は猜疑心の中で自分を閉じてしまう。表面的な「ささやき」や「唇を動かすだけの（……）おしゃべり」によって自分自身を隠蔽するために言葉が使われる。それに対して、ヨゼフィーネの歌は「一人一人」の心の中にしみ込んでくるのである。

では何が伝えられるのか。それは「敵対する世界の騒乱のただ中にある我が民族の哀れな生いのちのよう」であると言われ、また「無」とも等置される。つまり、ヨゼフィーネの歌声が「民族のメッセージ」として伝えるのは、人間の実存の本質である根源的孤独である。このような根源的孤独を自覚し、虚無感に襲われるとき、社会を構成しているすべての制度、道徳、慣習などの秩序的な形成物——それをカフカは「法＝掟（Gesetz）」<sup>1)</sup>と呼ぶ——は無意味なものになってしまうだろう。しかし、人間は絶望の淵に沈むばかりではない。「無」は共同体の成員を結び合わせもする。「法」がすべての意味を失うとき、人間にとってもっとも大切なものが見えてくる。根源的孤独を確認し合うことによって浮かび上がってくるポジティブなものがある。それは子供のなものと関連している。

語り手はネズミ族の子供たちについて語る。

我々は学校を持たないが、我が民族から次から次へとあふれ出てくるのは見わたすこともできないほどの子供たちの群れである。まだチュウチュウ言えないので、楽しそうにシュッシュッとピッピッと鳴いている。まだ歩くことができないので、互いに転げ回ったり、押されてくるくる転がっていく。まだ目が見えないので、ぎごちなくみんなをかきわけ、ついでに誰も彼もひきずって行く。我々の子供たち！ あのような学校（他の民族の学校——引用者注）にいるみんな同じ子供たちではない。そう、いつも新しい、いつもいつも新しい子供たち。終わることもなく、途切れることもない。子供がひとり生まれると、もはやそれは子供ではない。すぐにその後ろに、新しい子供たちの顔が迫ってくる。大勢でせかせかと動き区別もできない。幸福のあまり顔をバラ色に輝かせて。（364）

語り手はすっかり興奮して子供たちのようすを生き生きと語っている。「幸福のあまり顔をバラ色に輝かせて」という表現には、生きる喜びにあふれる子供たちへの無条件の賛嘆が見られる。ここでは作者カフカが語り手と一体になり、踊るような筆致で子供たちのようすを描いている。

子供の描写に続いて、次のように言われる。

死滅することがなく、根絶することもできないある子供らしさ（eine gewisse

unerstorbene, unausrottbare Kindlichkeit) が我が民族を貫いている。我々の最良のものである、誤つことのない実際的な分別 (der untrügliche praktische Verstand) に真っ向から矛盾することであるが、我々はときどき、まったくもって愚かな行動に出る。しかもまさに、子供たちが愚かな行動に出るのと同じ仕方で、意味もなく、浪費的に、気前よく、軽率に。そしてしばしばささいな楽しみのためにこういったあれこれをするのだ。そういったことをするときの我々の喜びが、もはや子供たちの喜び (Kinderfreude) のような全き力を持つことができないのはもちろんであるにしても、子供たちの喜びの幾分かはまだその中に生きているのは確かである。我が民族のこの子供らしさから、ヨゼフィーネもまた前々から利益を得ているのである。(364f.)

「実際的な分別」とは、すでに述べた「抜け目なさ」を言い換えたものである。それが「我々の最良のもの」であり、「誤つことのない」ものであると言われるのは、語り手が大人の立場にしっかりと立っており、それが「生きるための戦い」に不可欠なものであると固く信じているからである。にもかかわらず、語り手は、「死滅することがなく、根絶することもできないある子供らしさが我が民族を貫いている」と述べ、自分たち大人の中にも「子供たちの喜びの幾分か」がまだあることを認める。「死滅することがなく、根絶することもできないある子供らしさ」、そしてそれと不可分の「子供たちの喜び」、それこそが、ヨゼフィーネの歌から響いてくるものである。

「死滅することがなく、根絶することもできないある子供らしさ」は、カフカが遺稿の断章に記した言葉で言えば、「不壊なるもの」のことである。

不壊なるもの (das Unzerstörbare) は一つである。一人一人の人間がそれであり、同時にそれはすべての人に共通のものである。人間同士の結びつきの比類なき分かちがたさはそこから来ている。<sup>2)</sup>

ここでは一人一人の人間が「不壊なるもの」であると言われているが、別のところでは、「自らの内にある不壊なるもの」<sup>3)</sup>という表現も使われている。個々の人間が「不壊なるもの」を分有しているがゆえに、一人一人の人間が「不壊なるもの」なのだと思えることができよう。「不壊なるもの」はまた、全体として「一つ」なので人間同士を結びつけるものでもある。カフカは「不壊なるもの」の存在を確信している。つまり、人間の本質はただ虚無であるばかりではない。そこには「不壊なるもの」、子供の無垢さが潜んでいるのである。だがそれは、「生きるための戦い」のために必要な「抜け目のなさ」のために見えなくなっている。人間が共通に持つはずの、善いもの、美しいもの、純粋なもの、すなわち「不壊なるもの」が隠蔽され、人間同士が猜疑心の塊となって孤独に自閉している。『ある犬の探究』の探究犬が言うように、人間は「沈黙の要塞」<sup>4)</sup>なのである。だがカフカは、「不壊なるもの」が人間の奥底に共通にあり、芸術がそれを呼び起こし、人々の苦しみをやわらげ、人々を結びつけると考える。「不壊なるもの」を互いに確認し合うことで、互いの「比類なき分かちがたさ」が確信されると考える。「不壊なるもの」を互いに確信し、それを十全に展開するとき、転げ回って遊ぶ子供たちが感じるような喜び (Kinderfreude) を感じるができる。そしてこのような人と人との結びつきの喜びこそが人間にとって生きる糧となる。『変身』の主人公グレゴールが憧れ求める「未知の糧」

とはまさにこの喜びのことである<sup>5)</sup>。「不壊なるもの」を根底に据え、それを展開していくことを促す秩序、抑圧的な「法=掟」ではなく、人々を解放する方向に機能する新しい秩序、新しい「法」——いわゆる「自由な生」<sup>6)</sup>——を、カフカは求めたのである<sup>7)</sup>。

ヨゼフィーネの歌が聴衆にどのような効果をもたらすのかについての描写をさらに見てみよう。

戦いのさなかの、このたまさかの休止にさいして、民族は夢を見ているのだ。それはまるで、個々の者にとって四肢の関節がゆるんでいくかのようなのである。安らぎを得られない者がやっと、民族という大きな暖かいベッドで、好きなだけ手足を広げ、伸ばすことを許されたかのようなのである。この夢のあちらこちらへとヨゼフィーネのチュウチュウ鳴きが響く。  
(……) 哀れな短い子供時代の、失われてしまい、二度と再び見出されることのない幸福の幾分かがある。しかしまた、活動的な今日の生活の、ささやかで、捉えようがなく、それでも確かにあって、ただ鳴り響かせることができない快活さの幾分かもまたそこにはある。(366f.)

一人一人の聴衆は、共同体の中に融け込んで「安らぎ」を得ている。「不壊なるもの」が自分の中にも、また共同体の成員一人一人の中にもあるという確信が、彼らに安らかな共通の「夢」を見させるのである。聴衆は子供時代の「幸福の幾分か」を思い起こし、確かに存在するにもかかわらず今では十分に展開されることがなくなってしまった「快活さの幾分か」、つまり、生きる喜びを感じ取っている。聴衆はヨゼフィーネの歌によって生きる喜びを呼び覚まされ、聴衆の喜びによってヨゼフィーネのほうも自身の存在の意味を確信し喜びを感じる。ここでは、喜びの交換——つまり、交歓——を通じての芸術家と共同体の理想的な関係が実現している。

## 5. 再びヨゼフィーネとネズミ族の関係

だが、このような理想的な関係が実現するのは、ヨゼフィーネの歌が歌われ、聴衆がそれに耳を傾けている「しばしの間」(367) だけのことである。すでに見たように、語り手によれば、ネズミ族は「父親のように」ヨゼフィーネを保護していると思っているし、ヨゼフィーネのほうはヨゼフィーネのほうで「民族を守っているのは自分」であると考えている。両者の認識は大きく隔たっているのである。物語の後半はヨゼフィーネとネズミ族のすれ違いに焦点が当てられる。

ヨゼフィーネの「追従者」(367) でもなく、「信奉者」でもない、その意味でネズミ族一般の典型であると言える語り手は、ヨゼフィーネの「公演を聞く機会を逃そうとは思わないだろう」とその歌の魅力は認めつつも、ヨゼフィーネ自身に対してはどちらかというと不信感を抱いている。「自分はそのような危機の時代にあなた方に新しい力を与える云々」というヨゼフィーネの主張には同意しない。また、ある公演で不意に敵に襲われ多くの者が命を落とすことがあったが、この件について語り手は、ヨゼフィーネは「誰よりも安全な場所を確保しており、彼女の信奉者に守られてひそかに、大急ぎで、真っ先に姿を消した」(367f.) と批判的に語る。

さらに語り手は、「自分の歌のことを考慮してすべての仕事から解放してほしい」(368) というヨゼフィーネの要求も正当とは思わない。ヨゼフィーネは、仕事の労苦によって声がだめに

なる、十分な休息が取れず新しい歌のための英気が養えない、ぐったりしてしまって最高の業<sup>わざ</sup>が達成できないと訴えるが、ネズミ族は「彼女の言葉に耳を傾け、そしてそれを聞き流す」(369)。語り手はこの件について、「感激しやすい者なら(……)その要求には正当性が内在していると結論づけるかもしれない。我が民族はしかし、別の結論を出し、すみやかにその要求を拒否する」(369)と述べる。語り手がネズミ族の拒絶を正しいものとしているのは明らかである。

語り手によれば、ヨゼフィーネは「仕事嫌い」(370)ではない。仕事嫌いではないヨゼフィーネが仕事からの解放を求める真意について、語り手は次のように推測する。

彼女が求めているのはつまり、彼女の芸術の公的で明確な認知 (Anerkennung)、時代を超えて続く、これまで知られたすべてをはるかに凌駕する認知にすぎないのだ。(370)

ヨゼフィーネは、彼女の芸術が民族にとって価値あるものであると認めてもらうことを求めている、しかも単なる認知ではなく、時代を超える永遠の芸術であり、最高の偉大さを有するものであると認めてもらうことを望んでいる、と語り手は考える。

仕事からの解放を求めるヨゼフィーネの戦いは続く。要求を拒絶されたヨゼフィーネはまず、自分の歌の中にある「コロラトゥーラ(装飾的旋律)」(373)を減らすと警告する。しかし、民族は何も言わない。彼らは、コロラトゥーラをやめると言ってみたり、また使うと言ってみたりと、ころころ変わるヨゼフィーネの発言を「聞き流す」。コロラトゥーラの削減が効果がないことがわかると、ヨゼフィーネは今度は、仕事で足をケガしたので長い間立って歌うことができない、歌を縮めなければならないと言い出す。だがネズミ族は、歌が短縮されても「あまり大仰に騒いだりはしない」(374)。ヨゼフィーネはさらに、「疲れたとか、気分がすぐれないとか、体が弱っているとか」(375)、さまざまな「口実」(375)を使う。

ヨゼフィーネについてのこのような報告はしかし、彼女に否定的な語り手によるものである。語り手によって伝えられる、いわゆる「芸術家のわがまま」は、信頼できない語り手の邪推とみなすこともできよう。実際語り手は、「ヨゼフィーネは年を感じ始めており、声が弱まってきているのでそんなに強く押してくるのだと信じている者は多い」(372)とも言っているのである。例によって語り手はすぐに、「私はそのことを信じていない」と強く否定するのであるが、そのような形で作者が読者に真実を暗示していると考えられる。つまり、ヨゼフィーネがコロラトゥーラを削減しているのは高齢化のために体力が続かないからかもしれないのである。足のケガについても、語り手は「誰も本当の傷だとは信じていない」(374)と言い、「皮をすりむいただけで足を引きずるのでは、民族全体が足を引きずり続けることになるだろう」(374)と辛辣な皮肉を浴びせるのだが、本当に「信奉者によって支えられ」(374)ねばならないほどのケガなのかもしれない。さらに語り手は、「疲れたとか、気分がすぐれないとか、体が弱っているとか」のヨゼフィーネの訴えを「口実」であるとみなし、「今や我々はコンサートのほかにお芝居も観ているわけだ」(375)と冷たく突き放しているが、これもヨゼフィーネの「お芝居」などではなく、実際に体力と気力が衰えているのかもしれない。ヨゼフィーネの失踪がそれを裏づけるように思われる。



## 6. 消えたヨゼフィーネ

語り手によって最後に報告されるのは、ヨゼフィーネが「消えてしまった」という最新ニュースである。語り手は、「ヨゼフィーネは消えてしまった。彼女は歌うことを望まない。歌うよう求められることさえ望まない。今度こそ完全に我々を見棄ててしまった」(376)と述べ、要求を受け入れられなかったヨゼフィーネがついに民族を見放して去ってしまったと考える。

だが果たしてそうなのだろうか。語り手は次のように言う。

あの賢い彼女が計算違いをしているのは奇妙なことだ。そもそも彼女は計算などしておらず、運命というものにただそのまま身をまかせた——我々の世界では非常に悲しい結果にしかない——のだと思えるほどだ。(376)

語り手は、ヨゼフィーネが「計算違いをしている」と考えている。語り手がそう考えるのは、彼自身が「計算」しつつ生きるのを当然のことと考える存在、つまり、「抜け目なさ」を生きる原理としている存在だからである。作者が語り手を通じて読者に伝えようとしている真相は、後半部分に示されているだろう。ヨゼフィーネはおそらく計算などしておらず、「運命というものにただそのまま身をまかせた」、つまり死ぬために身を隠したのである。年を取ってもはや歌を歌うことができなくなったので、ネズミ族のもとを離れたのである。

消えてしまったヨゼフィーネの搜索に、彼女の信奉者だけでなく、多くの者が参加する。しかし、彼女は見つからない。語り手は最後に、ヨゼフィーネを失ったネズミ族の様子を語り、彼女の喪失がどのような影響を及ぼすかを推し量る。

しかし民族は、冷静に、失望の色を示すことなく、尊大に構えている。外からはそう見えなくても、彼らはまぎれもなく、贈り物 (Geschenke) を与えることしかできず、受け取ることがけっしてできない自足した大衆、ヨゼフィーネからも受け取ることができない自足した大衆なのだ。この民族は自分の道を引き続き歩んでいこう。(376)

ヨゼフィーネの失踪をネズミ族が淡々と受け入れていることが報告される。ヨゼフィーネがいなくてもこれまでと変わらず生きていこうと予想している。ネズミ族が「自足した大衆」であるというのは、ヨゼフィーネを必要としないということである。ヨゼフィーネという存在の意味は薄められる。語り手が芸術家を理解しない一般大衆の側に立っていることがここでも明らかになっている。

ただ、ネズミ族が「贈り物を与えることしかできず、受け取ることがけっしてできない」民族であるとはどういうことだろうか。これは、ネズミ族がヨゼフィーネを称賛し、世話をするなどして、彼女に尽くすことはできても、ヨゼフィーネの側からの「贈り物」、つまり彼女の歌それ自体を受け取ることができないということである。実際、ヨゼフィーネはネズミ族には自分の歌が本当には理解されていないと感じていたし、また語り手の方も、ヨゼフィーネの歌と普通のチュウチュウ鳴きとの区別ができなかった。つまり、語り手は、どのみちヨゼフィーネとネズミ族間のコミュニケーションは成立していなかったのではないかと断言しているのである。ただ、ここで唐突にも思われる「贈り物」の比喩が持ち出されたのには理由がある。それは、

カフカにとってコミュニケーションが「贈り合うこと」を意味しているからである。ではいったい何を贈り合うのか。

語り手は続ける。

彼女は我が民族の永遠の歴史の中の一つの小さなエピソードであり、民族はその喪失を乗り越えるだろう。我々にとってそれは簡単なことにはならないだろう。完全な沈黙の中でどのように集会を行えばいいのか。もっともヨゼフィーネがいるときだって、集会は沈黙の中で行われたのではなかったか。実際の彼女のチュウチュウ鳴きは、記憶に残っているものよりも格別高らかで、生き生きとしていただろうか。それは、彼女が活着しているときも、単なる記憶以上のものだったのか。ヨゼフィーネの歌をあんなにも高く評価したのは、むしろ民族の叡智ではなかったか。歌がそのようなものであっても失われることのないものであるがゆえに、あんなにも高く評価したのではないか。(376f.)

語り手は、民族はヨゼフィーネの「喪失を乗り越えるだろう」が、「我々にとってそれは簡単なことにはならないだろう」と言う。ところがすぐに、「実際の彼女のチュウチュウ鳴きは、記憶に残っているものよりも格別高らかで、生き生きとしていただろうか」と、ヨゼフィーネの歌の価値を疑い始める。そして、「ヨゼフィーネの歌をあんなにも高く評価したのは、むしろ民族の叡智ではなかったか」と、自分たちネズミ族一般の側を逆に持ち上げる。

だが、ここでも作者が語り手の背後でメッセージを読者に伝えている。それは、「歌がそのようなものであっても失われることのないものであるがゆえに」という言葉である。「歌がそのようなもの」であるとは、歌が「格別高らかで、生き生きと」したものではなく、ヨゼフィーネがいた当時も、今「記憶に残っているもの」程度のものであったということであり、語り手はそう言うことで、ヨゼフィーネの歌の価値を低く見積もろうとしている。しかし背後にいる作者は、語り手にそのように語らせつつも、まさにこの「歌がそのようなものであっても失われることのないものである」という一節に深い意味を含ませている。つまり、歌は「失われることのないもの」、「不壊なるもの」なのである。ヨゼフィーネがいよいよがいがまいが、語り手が低く評価しようがすまいが、歌に含まれていた「不壊なるもの」は、一人一人の内部に厳にあり、民族全体に共通のものとして存在し続けるのである。

物語の締めくくりは次のようになっている。

そういうわけで、ひょっとしたら我々は、彼女がいなくなってもそれほど困ることはないのかもしれない。ヨゼフィーネはしかし、選ばれし者たちに科される——それが彼女の考えだ——地上の苦しみから救済されて、我が民族の数知れぬ英雄たちの中に上機嫌で消えていくだろう。そしてすぐに、というも我々は歴史を書かないからだが、彼女の英雄仲間(Brüder)すべてと同様、高められた救済のうちに忘れられていくだろう。(377)

語り手は再度、ヨゼフィーネがいなくても「それほど困ることはないのかもしれない」と言う。彼女は英雄たちの一人に祭り上げられるだろう、そしてそのことを知ったら当人は「上機嫌」となるだろう、しかし、英雄たちが常にそうであるように、現世での苦しみから解放され、崇められはするが、すぐに「忘れられていくだろう」と推測している。



語り手は、「この民族は自分の道を引き続き歩いていこう」、「彼女はわが民族の永遠の歴史の中の一つの小さなエピソードであり、民族はその喪失を乗り越えるだろう」、「彼女がいなくなってもそれほど困ることはないのかもしれない」と、何度も繰り返す。だが、ヨゼフィーネの存在の意味が過小評価されればされるほど、読者の中には本当にそうなのか、本当にヨゼフィーネはそんなに簡単に「忘れ」去っていい存在なのかという疑念も増大していく。芸術家というものを理解できない、一般のネズミ族の代表である語り手は、その存在を軽んじる。しかし、語り手とは異なり、作者はけっしてそうは考えていないのである。

### むすび

以上、物語の流れに沿って、ヨゼフィーネの歌が伝えるのが「平安」であること、そしてそれが、ネズミ族が戦いとしての生においてよりどころとしている「抜け目なさ」と対立する、子供らしい無垢な喜びであること、一言でいうなら、「不壊なるもの」であることを見てきた。普段「抜け目なさ」で武装しているネズミ族が、ヨゼフィーネの歌を聴くとき、「体と体をくっつけて温め合」う。そして、一人一人の内部にあり、また民族に共通に存在する「不壊なるもの」を確認し合う。ヨゼフィーネの歌を聴いている瞬間だけは、ヨゼフィーネとネズミ族の、そしてネズミ族の成員相互の真のコミュニケーションが成立している。ただ、それは瞬間だけのことである。語り手は——そしておそらくごく普通の一匹一匹のネズミもまた——、ヨゼフィーネの歌に強く惹きつけられながら、歌を聴いていないときはその意味を疑い、ヨゼフィーネという芸術家存在の価値が理解できない。だが、何かが「記憶」の中に残るだけでも十分なのである。なぜなら、「不壊なるもの」は、たとえ民族がそれを理解しなくても、一人一人の中に、そして共同体の中に、確かなものとして存在しているからである。

これがこの物語が伝えるメッセージである。

### 注

- 1) 短編『掟の門 (Vor dem Gesetz)』の表題で使われている言葉。
- 2) Kafka, Franz: *Nachgelassene Schriften und Fragmente II*, Kritische Ausgabe, hrsg. v. Jost Schillemeit. Frankfurt a. M. 1992, S. 66 u. S. 128.
- 3) Ebd., S. 55.
- 4) Ebd., S. 444.
- 5) これについては、佐々木博康「グレーテの権力性と「未知の糧」—カフカ『変身』試論(2)—」(『大分大学教育学部研究紀要』, 第19巻第1号, 1997, S. 39-49)を参照のこと。
- 6) 1922年2月20日の日記にカフカは、「飢えた獣よ、道はただ前にのみ続いている。食べるのできる糧への、息のできる空気への、自由な生への道は。」と書いている。Kafka, Franz: *Tagebücher*, hrsg. v. Hans-Gerd Koch, Michael Müller und Malcolm Pasley. Frankfurt a. M. 1990, S. 903.
- 7) 「不壊なるもの」については、佐々木博康「カフカの『ある犬の探究』(2)—「質問すること」と空中犬—」(『大分大学教育学部研究紀要』第38巻第1号, 2016, 3-5頁を参照のこと。

Kafkas *Josefine, die Sangerin oder das Volk der Mause* (2)

—Die Botschaft von Josefines Gesang—

SASAKI, Hiroyasu

## Abstract

Im Genuss von Josefines Gesang streifen die Mause alles an praktischer Alltagsvernunft ab. Sie werden sich der Einsamkeit ihrer individuellen Existenz bewusst, was sie zur Erkenntnis fuhrt, dass sie eine kindliche, schlichte Lebensfreude im Innern gemeinsam haben. Sie erfahren sich als Gemeinschaft. Kafka spricht vom 'Unzerstorbare'.

Dieses 'Unzerstorbare' ist aber eben nur wahrend der Vorfuhrung prasent, die Wirkung des Gesangs auf ihre Dauer beschrankt, und der anschließende Ruckfall in den Status quo ante des Arbeitslebens so gut wie sicher. Josefine fordert um der Kunst willen eine Befreiung von der taglichen Arbeit. Vom Mausevolk wird das abgelehnt, worauf sie den Gesang verweigert und verschwindet.

Vom Erzahler wird dieser Abgang resignativ kommentiert, von Kafka aber als großer sozialer Verlust bedauert.

【Key words】 unreliable narrator, Kunst, Kunstler, das Unzerstorbare